

カキのボックス栽培における品種特性					
[要約] カキのボックス栽培では「伊豆」は品質は良いが収量が少ない。「松本早生富有」は収量が多いが、小玉傾向になる。「新秋」は汚損果が多くなる。「太秋」は日焼け果や汚損果が発生し、生育量も少なくなる。					
担当部署	園芸研究所・果樹部・落葉果樹研究室			連絡先	092-922-4946
対象作目	果 樹	専門項目	栽 培	成果分類	生理生態

[背景・ねらい]

樹高が高く、高所作業の多いカキ栽培において、管理作業の省力・軽作業化および安全化を図る低樹高栽培法の一つとしてボックス栽培が注目されている。カキでは「前川次郎」を中心に導入・試作されているが、本県で栽培されている主要品種のボックス栽培適応性は不明である。そこで、ボックス栽培における品種特性を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 「伊豆」は1樹当たり収穫量は少ないが、果実肥大は慣行栽培並みで、着色が優れ、果肉硬度が堅く、汚損果が少なくなる等果実品質は良くなる。樹冠も広がり総新梢長も長い(表1、2、図1)。
2. 「松本早生富有」は1樹当たり収穫量は最も多い。果実は、果重が軽いが糖度が高く、汚損果も少ない。樹冠の広がり最も多く、総新梢長も「伊豆」に次いで長い(表1、2、図1)。
3. 「新秋」は1樹当たり収穫量はやや少なく、果実肥大は慣行栽培並みで、着色は良いが、汚損果や日焼け果が多い。樹冠の広がり、総新梢長とも「太秋」よりやや大きくて長い(表1、2、図1)。
4. 「太秋」は1樹当たり収穫量は多く、果実は最も大きい。慣行栽培より果重が軽くなる。「新秋」と同様に汚損果や日焼け果が多い。樹冠の広がりが小さく、総新梢長も短い(表1、2、図1)。

[成果の活用面・留意点]

1. カキボックス栽培指導の参考資料として活用できる。
2. 「松本早生富有」では、果実肥大を促進するため着果過多に注意する。
3. 「新秋」は汚損果防止のためボックス間隔を広くし、通風・採光を図る。
4. 「太秋」では樹齢とともに樹勢低下が激しいため、強めの切り返し、植え替え、施肥量の増加、補植苗の準備を他の品種に先駆けて行う。

[具体的データ]

表1 カキボックス栽培における品種の違いと収穫量および樹冠 (平成8～12年)

品種	1樹収穫量						定植時の苗長	樹高	樹幅
	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	累計			
	kg	kg	kg	kg	kg	kg	cm	cm	cm
伊豆	0	0.8	1.6	1.1	4.1	7.6	102	187	114
松本	0	2.0	3.1	4.5	5.0	14.5	114	190	122
新秋	0	1.2	1.7	2.0	3.9	8.8	107	174	100
太秋	0	1.7	1.8	1.7	4.4	9.7	124	147	88

- 注) 1.平成8年3月に25リットルボックスに抵触し、用度は真砂土と堆肥を1:1で混用したものを用了。
 2.施肥量は1樹当たり成分量でN:14、P:12、K:14gとし、毎年3月に施用した。
 3.西村は「西村早生」、松本は「松本早生富有」を示す。
 4.定植時の苗長は、平成8年3月の植栽時に切り返した後の苗長。
 5.樹高、樹幅は平成13年2月に測定。

表2 カキボックス栽培における品種の違いと果実品質 (平成9～12年)

品種	果形		果重		糖度		果皮色	種子数	硬度	汚損
	果径	果高	(慣行)		(慣行)					
	cm	cm	g		%				kg	
伊豆	84	57	239	239	15.2	14.5	4.6	2.1	3.4	0.3
松本	82	57	217	273	16.2	15.6	4.8	1.7	3.0	0.2
新秋	81	61	243	255	15.2	17.5	4.2	3.6	4.1	1.2
太秋	83	61	255	354	16.1	17.4	3.8	1.3	2.1	1.3

- 注) 1.果実品質は平成9～12年の平均値、果皮色は赤道部のカラーチャート値。
 2.(慣行)は、慣行栽培での平年値。

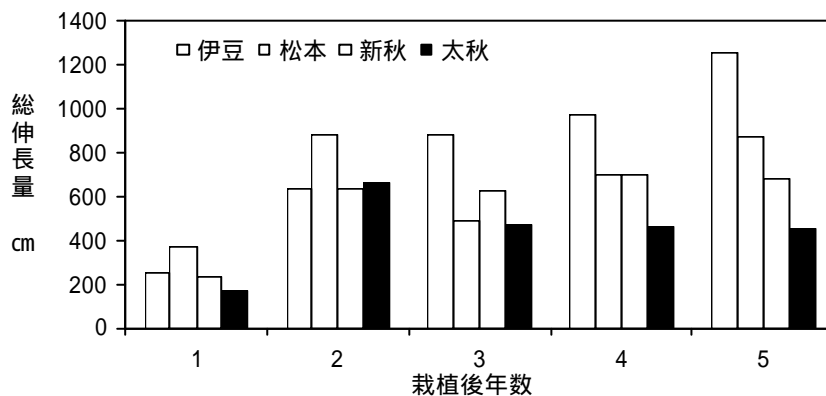


図1 カキボックス栽培における品種別総新梢長

[その他]

研究課題名：低樹高、超密植による省力生産技術開発

予算区分：県特

研究期間：平成12年度(平成8～12年)

研究担当者：林 公彦、千々和浩幸、牛島孝策

発表論文等：九州農業研究第61号